

◇逆らって生きることも

私は、30年程前に年賀状を廃止しました。それを知らずに年賀状を送ってくれる人には、申し訳ないとは思いつつもほとんど書きません。大病を患ったとか、結婚したとか、就職ができたといった特別の場合などに何通か書くぐらいです。

年賀状くらいでも、世の中に逆らって生きるのは楽ではありません。したがって、世に阿ることなく、時には闘いを挑むような生き方は、とても厳しいことかもしれません。しかし、凶悪な犯罪などが連日のように報じられるこの国を立て直すには、教育が担わなければならないことも多く、この厳しい道も歩まなくてはならないように思います。

「1年を考えるなら田を耕せ、10年を考えるなら木を植えろ、100年を考えるなら人を育てろ」と言われるのですから、教育の有り様は、国の命運を左右すると考えるべきです。

「沈黙は金、雄弁は銀」との言葉は、本来、沈黙より雄弁を評価する言葉(酬)として使われたとのこと。「直訴はご法度」の時代はとうに終わっています。改革のために和が乱れることもあるでしょう。和を大切に思う心は尊いと思いますが、「和を以て貴しと為し…」で始まる憲法をつくった聖徳太子は、大改革を行いました。

指導要領の改定の度に示された数々の教育改革も、何ら成果を上げることなく、次の改定で見直されることになるのは、現場との十分な調整の上に(現場の観計が反映されて)なされたものではない、上意下達の改革であることの証明でしょう。「問題は現場から見えてくる」との言(教訓)は、現場からの改革を強く促しているように思います。

子どもを健全に育てるために、教育界は、世の流れに逆らってでもやらなければならないことがあります。黙っていたのでは、世に阿る教育界と言われる日が来ないとも限らないでしょう。

◇しくじり行為には意味がある

「しくじり行為(言い間違い、書き間違い、読み間違い、聞き間違い、もの忘れ、置き忘れ、紛失など)には、それなりの意味(本心が潜んでいる)がある。具体的な行為の一つ一つに意味があると主張するつもりはないが、比較的多い」とオーストリアの精神医学者フロイトは述べています。

人の名前を忘れる、努力しても覚えられないのは、その人に対して、何か気に入らないことがあって、その人のことを考えたくないから。物を置き忘れたり紛失するのは、その物が気に入らなくて、捨ててしまいたい、新しい物にしたい、自分との関係が悪化してしまった人からももらったり、今となっては考えたくない事情のもとで入手した物だったり、早く忘れたらいい、思い出したくないとの意図が関与していたりする。そのことを本人に質すと、信じようとしないうし、その意図を必ず否定するのだそうです。

フロイトの精神分析に従えば、借りた本を返さないのは、ずっと手元に置いておきたいから。集金を忘れるのは、払いたくないから。計画したことを忘れるのは、計画を実行したくない。宿題を忘れるのは宿題をやりたくない。提出物を忘れるのは、提出したくないといった意向の表れということになるのでしょうか。そして、そのことを本人に確認すれば、必ず否定するということですから、本当のことは分からないということになるでしょう。

フロイトの精神分析をもとに、人を責め立ててはいけないと思いますが、時にはそのような考えることも必要なことかもしれません。私達の対応を見直すことにはなるでしょう。

明けましておめでとうございます。世に阿ることなく、流されることもなく、怯むこと^{ひる}なく職務を果たしたいと思います。今年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

◇終業式(12月25日<心の栄養>)

皆さんの中に、家畜やペットなどに生まれたかったという人はいるでしょうか。馬や牛、豚に生まれたかった、猫や犬に生まれたかったという人はいるでしょうか。おそろくないのではないかと思います。人として生まれたことは、それだけで誰もが素直に喜ぶべきことなのかもしれません。

人その他の動物の違いは何でしょうか。言葉が遣える、道具が使える、火が使えるなど、いろいろあるかと思いますが、一番の違いは、自分の使命や人生の意義を自覚して生きているかどうかなのだと思います。確かにその通りだと思います。家畜やペットに、そんな自覚があるとは思えません。したがって、人間は、人生の意義や使命を自覚し、いかに生きるかといったことを考えなかったら人間とは言えません。そのために良いと思われることは、いろいろあるかと思いますが、私の場合、それは剣道と読書です。人間としてのあり方を教えてくれます。だから、この二つは私にとって心の栄養です。体に栄養が必要なことは誰でも分かりますが、心にも栄養が必要です。さて、皆さんにとってそれは何でしょうか。

◇孝行猿物語

長野県の長谷村に伝わる民話を紹介します。長谷村に行ったことはないのですが、南アルプスの山に囲まれ、標高が千メートルを越えているそうです。人口は2000人程で、現在は伊那市となっています。

長谷村の柏木という集落に、勘助という腕のいい猟師が住んでいました。冬も近いある日、勘助は火縄銃を手に猟に出ました。しかし、その日は不猟で、兎一羽も捕れませんでした。あきらめて帰ろうとした時、木の上に大きな猿が一匹居眠りをしているのが見えました。気が進まなかったけれど、手ぶらで帰るよりはいいと思い、この猿を仕留めました。帰る山道で、悲しげな猿の声が聞こえましたが、あまり気にも留めず家路を急ぎました。家に戻って、仕留めた猿の両手両足を縛って囲炉裏端に吊し、夕食もそこそこに寝てしまいました。

夜中に物音で勘助は目を覚ましました。何事かと部屋の隙間から覗いて見ると、どこから入ってきたのか、三匹の子猿が、かわるがわる囲炉裏の火で手をあぶっては吊された親猿にとりつき、温めた手を傷口に当て、傷口を温め続けていました。

「ああ！ 昨日帰りに聞いた猿の鳴き声は、この子猿たちだったのか」と勘助は悔やみました。親猿を生き返らせようと、一生懸命の子猿たちが哀れでなりません。夜明けとともに子猿たちは山へ去って行きました。

この光景に深く心を打たれた勘助は、朝、親猿を背負って裏山に登り、大きな松の木の根元に手厚く葬り、祠を建てました。その後猟師をやめ、頭を剃ってお坊さんとなり諸国行脚の旅に出たのだそうです。

この話は、江戸時代に書かれた本に紹介されたということですが、修身の教科書(尋常学校)にも採用されました。村にある長谷小学校では、「孝行猿の日」(曜10月10日)の前後に、歌や踊り、劇を披露するなどして、孝行猿物語を受け継いでいるとのこと。

猿だって親を思う心は人に劣らないということを教えてくれる話です。虐待や殺人など、家庭内の悲惨な事件がしばしば報じられています。先生方には、子が親を愛し、親が子を慈しむ話を生徒にどんどん紹介してほしいと思っています。